

私の環境学

加藤 恵里
生物資源管理学科

環境とは何だろうか。辞書を引くと、「まわりを取り巻く周囲の状態や世界。人間あるいは生物を取り囲み、相互に関係し合って直接・間接に影響を与える外界。」(大辞泉)と定義されている。今回の機会をいただき、私の研究における環境とは何か、環境という視点からみて、今後どのような研究をしていきたいか書かせていただく。

私はもともと動物が好きで、大学も農学部を選んだ。野生動物に興味があったのだが、毎日動物に触れあいたいと考え、サークルではミニホースの会に入った。アメリカン・ミニチュアホースを世話し、子供相手にイベントを開催するサークルである。また、学部では、野生動物救護の研究室に入り、イエバトを用いた飛翔リハビリの実験をするなど、動物に触れあう学生生活を送っていた。しかし、大学院に入るにあたり、改めて野生動物に関わることはできないかと考えた。日本で野生動物が住んでいる場所、日常的な関わりのあるところとして、授業等で話題となった農山村と、そしてそこでおきている獣害が思い浮かんだ。日本で野生動物と一番近い関係にある農山村において、野生動物と人間がよい関係でない。そこには解決の道はないのだろうか、研究のテーマに選んだ。そして、今でもこのテーマを続けている。

獣害とは、イノシシやニホンジカによる農作物被害、生活被害、人身被害、出没による精神被害など、人間と野生動物の間における負の関係性を指す。獣害は、ここ20年ほどで大きな社会問題となってきた。鳥獣による農作物被害金額は200億円で横ばいに推移しており、そのうち6割をニホンジカとイノシシが占める。また、野生動物の生息地の分布も拡大している。こうした獣害の研究における環境とは、野生動物を中心とした自然環境といえよう。そのうちの、特に農山村の里山などの二次的自然に着目し、人間と野生動物をめぐる環境とは何か、農山村や農家への調査を通して考えていることを述べていく。

近年の獣害の要因は何か。そこには、複雑な状況が絡んでいる。具体的には、生息地となる森林

の変化(伐採、人工林化およびその荒廃)や、農山村の自然環境の変化(里山の荒廃、耕作放棄地の増加、カキやクリなどの果樹などの放棄)、過疎高齢化による労力不足などの農山村の変化と、狩猟圧の減少などの社会の変化、不適當な法規制での個体数コントロールといった行政の問題に加え、地球温暖化といった地球環境問題などがあげられる。これらは、自然の変化ではなく、自然に働きかける人や、社会、生活の変化といえる。また、農家にとって、農作物被害を与えるものは、イノシシやニホンジカなどの近年個体数を増加、生息地を拡大している動物から、アライグマなどの外来種、ツキノワグマなどの保護されている野生動物、カモシカのような天然記念物、虫、鳥類など様々である。農家にとっては、ほ乳類であれ、鳥類であれ、虫であれ、被害を与えていることには変わりなく、同じように駆除したい対象である。しかし、これらを駆除していいか、あるいは捕獲してはいけないかなどは、法律で決められている。そのもとには、もちろん生態的な調査に基づく科学的な根拠も関わっているが、慣習的なもの、動物と虫の扱いの違いなど、人間の価値によって決まるものも多い。

以上のような、社会と自然との関係と、人間の野生動物に対する価値に着目して、獣害とは何か考えることが、私の研究のオリジナリティである。もちろん、獣害の解決のためには、野生動物の生態など、自然科学の知識も必要であるが、最終的に何を目標に人間がどう関わっていくか考えていくことは、社会科学の役割である。

まず、社会の変化を考える。現代社会において、理想的な野生動物と人間の間を築くために目指すべき二次的自然とは、どのようなものだろうか理想的な里山とはあるだろうか。もともと里山とは、地域資源の利用の結果できた自然である。かつてのように、燃料としての薪炭の利用や、田畑の肥料としての刈敷の利用がないなか、里山の景観の維持は非現実的である。現在の農山村の問題として、過疎高齢化や農林水産業の衰退がある。

獣害の発生に関係する耕作放棄地の増加は、これらが要因の一部になっているが、里山を見た場合、その変化の要因はより大きな社会の変化であるのだ。なお、江戸時代は持続可能な社会だったといわれるが、後期になると資源が足りず、里山が過剰利用され、荒れていたという指摘もあり、過剰利用と過少利用のバランスを考えることは難しい問題である。いずれにせよ、現在の人間社会は自然から遠くなっている。生活において里山との関わりがなければ、里山という環境を作り出すことはできないのだ。

次に、野生動物に対する価値について考える。近年の農山村における野生動物の位置づけは、どのようなものだろうか。農家は、農作物被害があると悔しい、被害を与える野生動物は捕まえたいという思いがありつつも、実際に殺される場面ではかわいそうと思ったり、イノシシの仔であるウリボウに対してはかわいいとワナから放して餌付けしていたりと、多様な気持ち、関わりをもっている。また、「イノシシのいるような田舎」という語りで、若い人が農村を忌避する表現に用いたりもする。狩猟は、現代社会において最も野生動物が近くなる関わりかもしれない。そこでは、山の中に入った個々の野生動物との対峙、自然との向き合いが行われている。野生動物による認識に関するWebアンケートにて、都市住民と地域住民による認識の違いを比較したところ、都市住民にとって野生動物は遠い存在であり、偏った認識を持っていることが明らかになった (Kato et al. 2019)。都市住民の野生動物に対する認識は、自然の象徴として保護されるべき存在、あるいはキャラクター的なイメージを持つものであると同時に、ニュースを通して知った農作物被害や町への出没における人身事故などのネガティブな認識を持っていた。他方、地域住民は、野生動物を身近な存在として、ポジティブな認識もネガティブな認識も語られており、特にポジティブな認識は具体的かつ多様であった。現代の生活においては野生動物、そして自然は遠く、特に都市では生活と切り離されていること、そのため都市住民にとって野生動物との関わりを考えることは、ハードルが高いことが読み取れる。なお、近年の鳥獣行政は、野生動物の科学的な管理を目指している。この野生動物を管理するという野生動物管理は欧米発の考えであり、日本の動物観とは大きく異なる。

欧米と日本の動物観、そして自然観の比較の詳細は他稿に譲るが、こうした動物観も、人間の価値を議論するうえでは重要であろう。

以上を踏まえ、最後に私の今後の研究について述べる。これまで述べてきたように、人間と野生動物、そして自然の関係、環境を考えていくには、動物そのものだけでなく、人間の社会や価値も議論する必要がある。私は、ここ数年の調査・研究において、農家の持つ農山村の自然に対する価値とそこにおける農業の位置づけや、獣害対策支援を行うNPOなどの台頭における都市住民の農山村への関わりなどをテーマにしている。これらの研究から、里山のような二次的自然について、現代の社会、生活との今後の関係、都市住民を含めた地域資源管理の在り方などの議論を深めていきたいと考えている。滋賀県は、県民の環境意識が高い、里山などの自然に関わるNPO等の活動が活発な地域と言われている。新たなフィールドとして調査研究していくことが楽しみである。